雜誌

第三十五卷 六六八 (第六號 一三六)

耳鼻咽喉科領域ニ於ケル藥物療法ノ臨牀成績

Klinische Ergebnisse der Chemotherapie auf dem Gebiete der Ohrenheilkunde und der Krankheiten der oberen Luftwege. O. Fleischmann, D.m. W. 1929. S. 15.

最近人體内ノ病原菌ヲ撲滅センガタメニ藥物療法ガ應用セラル、様ニナツタガ、治療上豫期セラレタ變化ハ單ニ其一部分ニ限ラレ、未ダ何等外科的的操作ヲ遠ク驅逐スルニ至ラナイ。之レハ我々が初メ藥物療法ニ餘リニ期待ヲ持チ過ギタ結果デアツテ、悲シイカナ未ダ全身ヲ完全ニ消毒スル事ハ實現サレテ居ナイノデアル。外科的手術ト雖モ完全ナモノハ無ク藥物的操作ヲ加ヘナケレバ結果ガヨクナイモノ、外科的藥物的操作ガ同程ノ價值アルモノ、或ハ藥物ガ何等效無キモノ等色々アル。故ニ茲ニハ單ニ藥物ガ何ノ位ノ程度迄外科的手術ヲ補助シ得ルカニ就テ研究シテ見ヤウト思フ。

「サルバルサン」。之レハエーリッヒガ初メテ創製セル砒素劑デアツテ、人體ニハ比較的毒力少ナク然モ螺旋菌屬ニハ非常ニ猛毒デ殺菌的ニ作用シ、此ノ種ノ疾患ニ特效藥トシテ用ヒラレテ居ル。上氣道ノ微毒性疾患ニモ他ノ場合ニ於ケルト同様「サルバルサン」ハ今迄

用ヒラレタ藥物中最上位ニ位スルモノデアツテ、此藥物作用ニヨリ總テノ症候ガ忽チニ消失スルハ以前全ク見ラレナカッタ事デアル。併シ「サルバルサン」ニ水銀、「カドミウム」、「ヨード」等ヲ併用シテモ體中ヨリ菌ヲ全然痕跡モ無イ様ニ驅逐スル事ハ困難デアル。即チ「サルバルサン」モ他ノ螺旋菌毒ト併用スベキデアルガ、併シ「サルバルサン」ノ確固タル位置ハ何等他ノ藥物ニヨリ動搖スル事ハナ

1。
筋肉内注射トシテノ蒼鉛、徑口的ノ「スピロチード」モ共ニ驅微療法ニ用ヒラレル。而シテオッペンハイムーヨレバ此ノ者ハ口腔、咽頭、喉頭ノ護膜腫ニ特ニ良好ニ作用シ、クラス、クリム布林ゲルハ亦上氣道ノ微毒性疾患ニヨク效イタノヲ見テ居ル。即チ蒼鉛ハ特ニ「サルバルサン」ニ抵抗ノ強イ場合ニヨイ。併シ治療上ノ位置ハ「サルバルサン」ヨリ水銀ニ近ク、多クノ人ハ微毒第一期二期ノ療法ニハ「サルバルサン」ト蒼鉛ヲ併用スル様デアル。

耳ノ微毒性疾患ハ「サルバルサン」療法ノ興味ノ焦點ヲナシテ居ルガ、併シ非常ナ熱心ヲ以テ治療スルニ拘ラズ屢々然モ早期ニ重イ神經障害ヲ來ス事ガアルノハ甚ダ遺憾デアル。此ノ障害ハ治療終結後主ニ一乃至二ヶ月ノ後ニ現ハレルモノデ、其レハ砒素ノタメデアルトカ、微毒性ノ神經再發症デアルトカ盛ナ議論ガアルガ、最近ハ一般ニ後者デアルト云ハレテキル。併シ「サルバルサン」障害モ全然無條件ニ否定スル事ハ出來ナイモノデ、シーカルド、ミリヤン、ノイパウエル、ホーフエル等ハ微毒性疾患デナイモノニ「サルバルサ

ン」注射後聽神經ノ神經炎ヲ記載シテ居ル。併シ又微毒ノ眞ノ再發モ一般ニ考ヘテ居ル以上ニ非常ニ多イモノデアルト思ハレル。微毒ノ早期ニ「サルバルサン」ヤ水銀デ徹底的ニ治療スル様ニナツテカラ神經再發症ガ非常ニ稀ニナツタ事ハ異論ガ無イ事實デ、文献ニハ斯様ナ神經再發症ガ更ニ強力ナル「サルバルサン」療法デ全ク治癒セル事モ報告シテアル。之等ノ事實ヨリ神經再發症ハ「スピロヘータ」ガ「サルバルサン」ノ行キ難イ場合ニ集ツテ、一般ノ「スピロヘータ」ガ死滅スル結果免疫性物質ガ減少セルヲ機會トシテ急ニ増殖スルタメデアラウト説明サレル。故ニ耳ガ關聯シテキル時ハ初メ水銀デ治療シテ後「サルバルサン」治療ニ移ルガヨイト云ハレ、最近ハ蒼鉛ガ聽神經ニ對シテ「サルバルサン」ヨリ危險率ガ少ナイトシテ賞用サレテ居ル。遺傳微毒ニヨル耳疾患ハ一般ニ效果ナク、時ニ却ツテ惡クスル事サヘアル。之レハ普通微毒性ノ耳疾患ノ時ハ腦脊髄液ノ病的變化ヲ見ルガ、遺傳性ノ場合ハ大抵其ノ變化ヲ缺イデル事カラ説明出來ルカモ知レナイト思フ。

口腔ノ螺旋菌疾患、特ニブラウ、ブレンサン氏「アンギーナ」ニ「サルバルサン」ガ古クヨリ使用サレ且ツ多クノ人ハ賞用シテキルガ、スットンハ微毒ノ患者ニ「サルバルサン」療法ヲ行ツテキル際ニブラウ、ブレンサン氏「アンギーナ」ガ現ハレタノヲ見テ其レハ無意義デアルト云ツテキル。フッテルハ「スピロチード」、アルベルナツハ蒼鉛ガ效果アツタトイヒ、ブッシュマンハ二〇%「トリパフラビン」ヲ推賞シテキル。

微毒ノ藥物療法ガ成功シテ以來他ノ細菌ニモ同様ニ人體ニハ無害デ細菌ニノミ作用スル藥物ヲ發見センモノト努力サレ、其ノ結果種々ノ興味アル成績出デ我が耳鼻咽喉科領域ニ缺ク可カラザルモノ多クナツタ。即チ第一ニモルゲンロートノ唱ヘタ「ヒニン」誘導物デアツテ、肺炎球菌ニ對シテ「オプトヒン」、葡萄狀球菌、連鎖狀球菌ニ對シテ「オイキピン」及「ヴチン」等ハ甚ダ有效デアル。併シ「オプトヒン」ハ靜脈内、筋肉内或ハ又徑口的ニ與ヘ得ルモノデアルガ他ノ二者ハ「アルカリ」ニ對シテ非常ニ敏感ナタメ靜脈注射ノミニシカ用ヒラレズ、而シテスベヒトニヨレバ靜脈ニ注射スレバ直ニ分解シテ全ク效力ヲ失ヒ然モ時ニ血管ノ變化ヲ來ス事アリト云フ。彼此ノ理由デ「ヒニン」誘導物が影ヲヒソメテ其ノ代リ最近ハ「アクリジン」色素ガ用ヒラレル様ニナツタ。

「トリパフラビン」。初メエーリッヒガ「トリパノゾーマ」ニ使用セント製シタモノデアルガ、ブローニンゲニヨリ化膿菌、特ニ葡萄狀球菌、大腸菌ニ著效アルヲ知ラレ、モルゲンロートニヨリ「アクリジン」色素ノ一種デアル「リバノール」ガ連鎖狀球菌、葡萄狀球菌ニ有效ナルヲ證シテ以來遂ニ萬能藥トナツテ仕舞ツタ。兩者共ニ餘リ大量デナケレバ無害無刺激デアツテ局部的ニ或ハ一般的ニモ用ヒラレ、殊ニ血清ノ存在ニヨツテ其ノ效力ガ甚ダ増加スル故ニ靜脈内注射液トシテハ最モ好適デアル。

最近ノ藥物療法ニ用ヒラレル殺菌力ノ強い藥物ガ二三アル。第一ニ「ウロトロピン」デ近時四〇%ノ溶液トシテ靜脈内ニ注射スル。ポ

スニヨレバ血管中ニテ此ノ者ハ分解シテ殺菌力ノ強い「フ・ォ・ル・ム・アルデヒド」ニナルト云フ。次ニハ殊ニ連鎖狀球菌ニ有效ナル銀ノ「コロイド」劑デアツテ、フルマルギンガ電氣的ニ製シタ「コラルゴール」、化學的ニ製セラレタ「デスバラゲン」アリ。ベツトネルニヨレバ此ノ二者ノ銀劑ニハ甚シキ相異ガアツテ、電氣的ニ製シタ前者ハ血液像ニ對シ著シイ變化ヲ與ヘナイガ、後者ハ強い白血球増加ヲ見ルト云フ。是等ノ銀「コロイド」ノ作用ハ間接的デ觸接作用ノ働キヲスルト思ハレル。

以上簡單ニ細菌感染ノ治療ニ用ヒラレル物ヲ述ベタガ、次ニシニ「ツ・ェ・ル」ガ云ツタ様ニ細菌學の診斷ヲ正確ニシテ其ノ最モ適シタ藥物ヲ使用シナケレバナラヌ。併シ實際ニハ其等ヲ一々決メテ居ル事ハ困難デ、藥物ノ效果ハ病氣ノ初期ナル程宜ロシイト云ハレテ居ルガ、藥物療法ヲ行ハズニ其レヲ決メテ居ル間ニ疾患ハドン／＼進ンデ行クカモ知レナイ。併シ又適當ナ藥物ヲ適當ナ時期ニ用ヒテモ果シテヨク效クカハ問題デアツテ、實際ニ血液中ニ細菌ヲ滅殺スルニ足ル充分ノ濃度ノ藥物ヲ入レ得タトシテモ、注射後直ニ排泄作用ガ行ハレ且ツ滅菌力ハ徐々ニ作用スル。即チ細菌ニ打勝ツハ藥物ノミニ依ルモノニ非ズシテ、他ノ函數特ニ自然ノ防禦力ガ共ニ働クヲ要スルモノナルハ明白ナル事デ、藥物療法ノ際血液中ニハ或ル發育ヲ防グ力或ハ毒力ヲ弱メル力ガアツテモ、或ル例ニテハ斷然ト細菌ニ打勝ツニ或例ニテハ何等影響セズニ其ノ儘デアル事ガアル。此ノ點ヲ注意スレバ耳鼻咽喉科領域ヨリノ全身感染藥物療法ノ結果ガ人ニヨツ

テ異ナル事ヲ諒解シ得ルト思フ。

肺炎球菌傳染ノ際モルゲンロートハ「オプトヒン」ト肺炎球菌血清トヲ併用シ、ノイフェルドハ「オプトヒン」ト「トリパフラビン」ヲ實用シ、且ツ動物實驗ニヨリ甚ダ其ノ效力ノ強クナルヲ知ツタ。ブゼロハ「アルゴクローム」ト「アルゴフラビン」ヲ實用シテキル。

耳鼻科ノ領域デ最モ恐レラレテ居ル合併症デアル化膿性腦膜炎ニモ勿論藥物療法ガ應用セラレ、腦脊髄腔内ニ藥物ヲ注入シ直接ニ疾患セル腦膜ニ接觸セシメ得ルドラウト試ミラレタガ、此ノ方法ハ種々ノ點デ迷宮ニ終ツテ仕舞ツタ。即チ腦脊髄液ノ量カラ必要ノ濃度ダケノ量ヲ割出シテ注入シテモ、レーワンドースキーハ注入セラレタル液ハ物理的ニ彌散ノ方法ニヨツテ擴散スルモノナル事ヲ證明シ、注射部ノ上下ハ其ノ濃度ハ非常ニ小ナルモノデアアル。即チ若シ彌散ニヨリ藥液ガ腦膜ニ達シ得タトスルモ殆ド效果ハナイデアラウ。更ニ注入セラレタル液ハ急速ニ吸收サルモノデ其ノ爲メニ益々效果ハ減ズル。既ニ此ノ二ツノ事實デ腦脊髄腔内ノ藥物療法ハ殆ンド其ノ效力ガ考ヘラレナイノニ、更ニ藥物ハ時ニヨリ效アル事無キ事ヲ考ヘレバ益々其ノ感ヲ深クスル。「オイクピン」「ヴチン」等ハ長イ間好ンデ用ヒラレテ居タガ血液中ト同ジク非常ニ「アルカリ」ニ鋭敏デアルカラ腦脊髄腔注射トシテハ絶體ニ不適當デアアル。マシテクニツクノ例ノ如キハ兩下肢ノ兩側麻痺更ニ片側ノ胸及ビ下肢ノ知覺鈍麻ヲ來シタ。「アクリデン」色素モ亦不適當ナルモノデ、勿論非常ニ擴散度ハ高いガ、中樞神經系ハ絶體ニ毒性ハ無イト云フ色素ニ對シ

テモ非常ニ敏感ナモノデ、クラウスガ「リバノール」注入後死亡シタ例ヲ報告シタ事ヲ忘レテハナラナイ。適當ナルハ唯「オプトヒン」アルノミデアルガ此ノ者ハ單ニ肺炎、球菌ト腦膜炎球菌ニノミシカ作用シナイ憾ガアル。

此ノ狀態デ現今ハ腦膜炎ニハ靜脈内藥物療法アルノミデ、之レハフライシュマンガ「トリパフラビン」ヲ使用シテ實驗的ニ基礎ヲ築キアゲタ。即チ彼ハ腦膜炎ヲ起サセテ藥物ヲ血液中ニ入レタガ其ノ中ノ幾分力ガ腦脊髄液中ニ現レテ終日其處ニ留マルノヲ見タ。其ノ爲メニハ靜脈中ニハ非常ノ大量ノ藥物ヲ入レル事が必要デ、「トリパフラビン」リバノール「オプトヒン」等使用サレタガ、其ノ結果ハ屢々何等得ラレナカッタガ血液中ニ於テモ其レアルヲ考ヘレバ何等驚クニハ當ラナイ。更ニ最近「ウロトロピン」ガ廣ク用ヒラレル様ニナツタガ、此者ハ腦膜炎ニ於テハ腦脊髄液中ニ移行スル利益ガアルトイフガ、「ウロトロピン」ハ健全ナ又炎症アル腦膜炎ヲ通ツテ血液中カラ腦脊髄液中ニ可成リノ量ガ移行スルハ確實デアルガ、腦脊髄液中ニ於テ「フォルムアルデヒド」ニ分解スルカニ就テハ未ダ説明サレテ居ナイ。チンメルマンハ斯ル分解ヲスルガ「フォルムアルデヒド」ハ腦脊髄液中ノ蛋白質ト結合シテ新シイ化合物ヲ作り、此ノ化合物モ亦殺菌力ヲ有スルモノデアルガ、其ノ爲メニ檢出出来ナイノデアルト信ジテ居ル。之等ノ説明ノ眞偽ハ兎モ角腦膜炎ノ經過ニ對シテ「ウロトロピン」ガ如何ナル影響ヲ有スルカ、時ニ好影響アルモブゼロハ其レハ「アルカリ」作用ダト説明シテ居ル。

同様ナ理由デ耳及び上氣道ノ疾患ノ際局所ノ治療ニ用ヒラル、機會ガ非常ニ多ク、然モ此ノ際ハ充分ノ濃度ノ液ヲ使用シ得ル利益ガアル。「トリパフラビン」「リバノール」等ノ塗布ハ上氣道ノ急性炎症ノ場合ハ非常ニ效果アルモノデ 急性副鼻腔炎殊ニ上顎竇炎ノ如キハ單ニ食鹽水デ洗滌スルヨリ斯ル藥物デ洗滌スルガ更ニ優レテ居ル事ハ疑ナイ。副鼻腔炎ノミナラズ乳嘴突起炎手術後ニ「ヒニン」誘導物或ハ「アクリジン」色素デ洗滌スル時ハ存在スル傳染ヲ消滅セシムル外ニ 更ニ續發スル合併症ヲ防グ利益ガアル。而シテ殊ニ「アントロトミー」ノ際徹底的ニ搔爬シテ然ル後等は等ノ藥物ヲ使用スル時ハ一次の縫合ヲモナシ得ル事ヲフライシュマンノ經驗ハ示シテ居ル。硬腦膜及竇ノ診斷穿刺或ハ手術的損傷ノ後ニ「オイクピン」或ハ「リバノール」ガ「ゼ」ヲ用ヒル時ハ續發傳染ヲ防グ事ガ出来、又橫竇血栓ノ爲メニ竇ヲ除去シタ後ニ使用スルト血栓ガ更ニ進行スルヲ防ギ得ル事ガ多イ。頸部、鼻、耳等ノ膿瘍ノ際ハ手術的操作ガ最モ速カニ目的ヲ達シ得ル故ニ純粹ノ藥物療法ハ餘リ試ミラレナイガ、癰疽膿瘍ニ使用シテ好結果ヲ得タ事ガアル。レード、ボスハ腦膿瘍ノ後療法トシテ「リバノール」ニテ洗滌シ、フアイフェルハ「デIFTერი」保菌者ニ、イザックハ腦膜炎球菌保菌者ニ局所ニ用ヒテ全ク無菌ニスル事ガ出来タ。

耳鼻咽喉科ノ領域デハ微毒及び細菌感染ノ藥物療法ノ外ニ結核ノ療法モ亦重大ナル意義ガアル。ス皮ースニヨツテ初メテ金鹽ガ試ミラレ、「クリソルガン」及び「トリファール」ガ最モヨク知ラレテ居ル

が、コーレ等ノ研究ニヨレバエーリッヒノ如キ眞ノ藥物療法デナク直接ニ病原菌ニ作用シナイト云フ。金劑使用ニヨリ結核性組織ガ癒合シ又自然ノ防禦力ヲ増進スル事ガアルガ、未ダ其等ノ眞ノ作用ハ深く知ラレテ居ナイガ「ツベルクリン」ノ様ナ刺激療法デハナイカト云ハレテ居ル。即チ生體ノ病原菌ニ對スル反應ヲ強クスルモノナル故ニ使用ノ際分量及ビ個人ヲ注意シテ考ヘネバナラス。

上氣道殊ニ喉頭ノ結核性疾患ニ關シテ可成リノ人ガ注意スベキ成績ヲ得テ居ルガ、上記ノ藥物療法ヲ行フ際疾患ノ選擇ガ非常ニ重大ナ事デ、高熱ノ者、強く進ンダ病症ニハ不適當デアル。又肺臟ノ狀態モ非常ニ意義アルモノデ、上氣道ノ結核ヲ治療スル時肺臟ノ疾患ガ増殖性デアル時ハ非常ニ治療ノ效果多イガ、滲出性型デアル時ハ結果ガヨクナイ。後者ノ滲出性型ニ「アウロフォス」「ソルガナル」等毒力ノ弱イモノガ用ヒラレルガ果シテ效ガアルカ未ダ解ラナイ。一般ニ上氣道ノ結核ノ治療ニハ金療法ノ外ニ物理的或ハ手術的療法ヲ併用スベキデ、スピースハ金ト「ツベルクリン」ヲ用ヒルト云フ。

金誘導物ハ一般ニ靜脈内ニ注射サレルガ、「サノクリジン」ヲ製シタスツランドベルグハ疾患組織ノ局所浸潤ヲ行ツタ。又クラスニツヒハ銅ノ燒灼器ヲ用ヒテ燒灼スレバ病的組織ニ銅ガ沈積シテ效果ガアルト云フ。銅鹽ガ結核ニ賞用サレル事ガアルガ唯「ループス」ニミ應用セラレル。(丁)(光吉多喜男抄譯)

抄録

稀ナル耳翼及ヒ外聽道微毒ノ一例

Ein seltener Fall von Lues der Ohrmuschel
und des ohreinganges.

J. Teuffer, Monat. f. O. 1928, S. 1044.

病歴。三十三歳ノ女、以前ニ耳患ヲ患ヒタル事無シト云フ。四週間前ヨリ左耳ニ牽引痛アリ、外聽道入口部ニ發疹ヲ生ジ少量ノ膿性分泌アリ。患者自ラ「カミレン」ニテ洗滌ヲ續ケタルモ少シモ治癒ノ傾向ナク専門醫ヲ訪レテ來ル。最近疼痛劑甚トナリ、多少ノ體温上昇アリ。

局所々見。(一九二七年四月二五日)、左側外聽道入口部ニ相當スル耳翼ニ一錢銅貨大ノ圓形ナル潰瘍アリ。其ノ前縁ハ鋭尖ニシテ潰瘍底ハ肉芽ニテ被ハレ粘調ナル分泌物附着シ、外聽道ハ肉芽ニテ全ク閉塞サレタリ。乳嘴突起部ハ壓痛アレドモ軟部組織ノ腫脹ハ認メズ。患者ノ一般狀態甚ダ侵サレタレドモ他ノ部ニ何等病的變化ナク、特ニ微毒ノ症狀ハ認ムル能ハズ。

其ノ症狀惡性腫瘍ニ似タル故ニ試験切片ヲ作りテ組織學的検査ヲ行フニ、比較的血管ニ富ム肉芽組織ニシテ何等特別ノ所見ナシ。軟膏ヲ塗布シテ繃帶ヲ施シタルニ疼痛ハ幾分減少セリ。五月九日更ニ肉芽ヲ取リテ檢スルニ全ク炎性肉芽組織ニシテ惡性腫瘍ヲ思ハシムル